

日蓮大聖人御書全集

うえのどのごへんじ

上野殿御返事

すだつちようじやごしよ

(須達長者御書)

新版
1918
ゝ
1919

うえのどのごへんじ　すだつちようじやごしよ

上野殿御返事（須達長者御書）

こうあん　ねん　がつ　にち　さい　なんじようときみつ

弘安3年（'80）12月27日　59歳　南条時光

がもくいつかんもん　おく　た　お　おんこころ　そうら　もう

鵜目一貫文、送り給び了わんぬ。御心ざしの候えば申し

そうろう　欲　深　ごぼう　思

候ぞ。よくふかき御房とおぼしめすことなかれ。

ほとけ　易　々　成　そうろう　教　そうら

仏にやすやすとなることの候ぞ。おしえまいらせ候

ひと　教　もう　くるま　重　あぶら

わん。人のものをおしうると申すは、車のおもけれども油

塗　回　船　みず　浮　行　易

をぬりてまわり、ふねの水にうかべてゆきやすきように

教　そうろう　ほとけ　成　易　べつ　様　そうら

おしえ候なり。仏になりやすきことは別のよう候わず。

かんぱつ　渴　者　みず　与　かんぴよう　凍　者

旱魃にかわるるものに水をあたえ、寒氷にこごえたるもの

ひ 与

ふた

もの

ひと

与

に火をあたうるがごとし。また二つなき物を人にあたえ、

いのち

絶

ひと

施

遭

命のたゆるに人のせにあうがごとし。

こんじきおう

もう

おう

くに

じゆうにねん

だいかんばつ

金色王と申せし王は、その国に十二年の大旱魃あつて、

ばんみんう

し

数

知

かわ

しびと

橋

万民飢え死ぬることかずをしらず。河には死人をはしとし、

くが

骸

骨

塚

とき

こんじきだいおう

だいぼだいしん

陸にはがいこつをつかとせり。その時、金色大王、大菩提心

発

大

せ

施

たま

施

もの 皆

をおこしておおきに施をほどこし給いき。せすべき物みな

尽

くら

なか

こめごしよう

残

だいおう

いちにち

つきて、蔵の中にただ米五升ばかりのこれり。「大王の一日

ご 供 御

しんかもう

だいおう

ごしよう

こめ

取

い

の御くごなり」と臣下申せしかば、大王、五升の米をとり出

いっさい

う

者

いち

粒

に

粒

だして、一切の飢えたるものに、あるいは一りゆう二りゆう、

あるいは三りゆう四りゆうなんど、あまねくあたえさせ給さん 粒 し 粒 与 たま

いてのち、天に向かわせ給いて、「朕は、一切衆生のけかち後 てん む たま ちん いっさいしゅじょう 飢 渴

の苦にかわりて、うえしに候ぞ」と、こえをあげてよばく 代 飢 死 そうろう 声 呼

わらせ給いしかば、天きこしめして甘露の雨を須臾に下らたま へん 聞 かんろ あめ しゅゆ ふ

し給いき。この雨を手にふれ、かおにかかりし人、皆食にあたま あめ て 触 顔 ひと みなじき 飽

きみちて、一国の万民、せちなほほどに命よみがえり候い満 いっこく ばんみん 刹 那 いのち 蘇 そうら

けり。

がっしこく 須だつちようじや もう もの しちどひん しちど

月氏国にす達長者と申せし者は、七度貧になり七度

ちようじや そうら さいご ひん とき ばんみんみな逃 失

長者となりて候いしが、最後の貧の時は、万民皆にげうせ

し終 妻 夫 ふたり そうら とき ごしよう こめ
死におわりて、ただめおとこ二人にて候いし時、五升の米

いつか 糧 当 そうら とき かしよう しやりほつ あなん
あり。五日のかつてとあて候いし時、迦葉・舍利弗・阿難・

らごら しゃかぶつ ごにん しだい い たま ごしよう こめ 乞
羅睺羅・釈迦仏の五人、次第に入らせ給いて、五升の米をこ

取 たま ひ ごてんじくだいいち ちようじゃ
いとらせ給いき。その日より五天竺第一の長者となりて

ぎおんしようじゃ 造 そうろう 万 こころ
祇園精舎をばつくりて候ぞ。これをもつて、よろずを心

得 たま
えさせ給え。

きへん ほけきよう ぎようじゃ に たま 猿
貴辺はすでに法華経の行者に似させ給えること、さるの

ひと に 餅 つき に 熱 原 者
人に似、もちいの月に似たるがごとし。あつはらのものど

抱 惜 たま しょうへい まさかど てんぎ さだとう
もかかえおしませ給えることは、承平の将門、天喜の貞任

くに

者

思

そうろう

のようにこの国のものどもはおもいて候ぞ。これひとえ

ほけきよう

いのち

捨

故

しゆくん

背

ひと

に法華經に命をすつるゆえなり。まったく主君にそむく人

てん

ごらん

とは、天、御覽あらじ。

うえ

しょうごう

多

くじ責

当

その上、わずかの小郷におおくの公事せめあてられて、

み

乗

うま

さいし

引

掛

ころも

わが身はのるべき馬なし、妻子はひきかくべき衣なし。か

み

ほけきよう

ぎようじゃ

さんちゆう

ゆき

責

じき

かる身なれども、法華經の行者の山中の雪にせめられ、食

乏

思

たま

錢

いっかん

送

ともしかるらんとおもいやらせ給いて、ぜに一貫おくらせ

たま

ひんによ

妻

夫

ふたり

ひと

ころも

着

給えるは、貧女がめおとこ二人して一つの衣をきたりしを

こつじき

与

利咤

ごうし

なか

稗

びやくしぶつ

与

乞食にあたえ、りたが合子の中なりしひえを辟支仏にあた

尊

えたりしがごとし。とうとし、とうとし。くわしくは、ま

詳

もう

きようきようきんげん

たまた申すべし。恐々謹言。

こうあんさんねんじゅうにがつにじゅうしちにち

弘安三年十二月二十七日

にちれん

日蓮

かおう

花押

うえのどのごへんじ

上野殿御返事